

## せん孔細菌病（もも）の発生に注意

## 発生状況と今後の推移

平成30年9月の巡回調査で、もものせん孔細菌病の発病葉率が20%と平年値（発病葉率8%）を上回る結果となった。平成30年秋期の降雨日も平年と比べて多く、病原菌の越冬数が多くなっていることが予想される。



葉の病斑



果実の病斑



春型枝病斑

## 春型枝病斑の特徴

- ・枝が黒ずみ  
やがてへこむ
- ・新梢が赤っぽくなる
- ・新梢の伸びが悪い

疑わしい枝を見つけたら、取り除き、園地外で適切に処分する。

## 生態と感染

- ◆風雨によって感染が拡大する。葉や果実等の傷口や気孔から侵入して感染する。
- ◆気温10～35℃程度で感染するが、25℃前後が最も感染しやすい。
- ◆落葉痕部や枝の組織内部にて潜伏状態で越冬し、春になり気温が上昇すると増殖して、春型枝病斑（スプリングキャンカー）を形成し、その年の伝染源となる。

## 防除対策

- ◆春型枝病斑や発病葉は取り除き、園外で適切に処分する。
- ◆下記を参考に登録薬剤を散布する。生育期防除は10日間隔で実施する。
- ◆風当たりの強い園地では、防風ネットを設置するなどの対策を行う。
- ◆収穫後も発病部位を取り除くようにし、発病の多い園地では必ず秋期防除（9月上旬から2週間間隔で、無機銅剤等の登録薬剤を計3回散布）を実施する。

## 主な防除薬剤（果樹抜粋）

※農薬については最寄りのJAまたは農薬販売店等にご相談ください。

薬剤名（FRACコード）	希釈倍数	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
ICボルドー412（M01） ※1	30～50倍	散布	—	—
カスミンボルドー/カッパーシン水和剤（24・M01）	500倍		開花前まで	3回
アグリマイシン-100（41・25） ※2	1,500倍		収穫60日前まで	2回
マイコシールド（41） ※2	1,500～3,000倍		収穫21日前まで	5回
バリダマイシン液剤5（U18）	500倍		収穫7日前まで	4回
チオノックフロアブル/ トレノックスフロアブル（M03）	500倍		収穫7日前まで	5回
スターナ水和剤（31）	1,000倍		収穫7日前まで	3回
マスタピース水和剤（未）	1,000～2,000倍		前日まで	—

※1 ICボルドー412は薬害が生じるおそれがあるので、開花後～8月末までは使用しない。

※2 アグリマイシン-100、マイコシールドは同じ有効成分（オキシテトラサイクリン）が含まれる。オキシテトラサイクリンの総使用回数は5回であるため、計画的に防除する。

